

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500835

研究課題名(和文) ソーシャル・キャピタルが高齢者の健康に及ぼす影響に関する包括的実証研究

研究課題名(英文) A comprehensive study about the effect of social capital on health among older adults

研究代表者

福川 康之 (Fukukawa, Yasuyuki)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90393165

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：従来、ソーシャル・サポートなどのミクロな社会関係が個人の健康に及ぼす影響が指摘されてきたが、近年、コミュニティレベルのマクロな社会関係であるソーシャル・キャピタルの効果が期待されている。主要な研究の一つにおいて、我々は日本人の中高齢者に対する5年に1度の大規模全国調査の結果に基づき、互恵性としてのソーシャル・キャピタルと主観的健康との関連を検討した。マルチレベル分析の結果、個人レベルの互恵性と集団レベルの互恵性はいずれも高い主観的健康と関連していた。ただし個人レベルの互恵性と主観的健康との関連は、調査コホートが集団レベルの互恵性が低いコホート(近年のコホート)ほど強いことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)： While research on micro social relationships has notable implications that social support can influence an individual's health, more attention is now being directed toward the influences of an individual's macro social relationships with the community, i.e., social capital. In one of our main studies we examined the relationship between reciprocity among community dwelling adults and self-rated health by analyzing data from a survey conducted every 5 years between 1991 and 2011 in Japan. A multi-level analysis showed that both at the individual and group levels, higher reciprocity was associated with higher self-rated health. However, there was an interaction effect involving reciprocity at two levels: a stronger correlation between individual reciprocity and self-rated health was observed for individuals from a recent cohort with a low level of group reciprocity.

研究分野：心理学

キーワード：ソーシャル・キャピタル 健康 高齢者 互恵性 信頼性 社会的ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

日本は世界の最長寿国であるものの、高齢者の健康水準は必ずしも高くない。社会関係が高齢者の健康に影響を及ぼすことは広く知られているが、近年、ソーシャル・サポートのようなミクロな社会関係とは別に、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)と呼ばれる、地域やコミュニティなどの個人のマクロな生活環境が健康に及ぼす影響が注目されはじめています。

2. 研究の目的

本研究では、1) ソーシャル・キャピタルが高齢者の健康に影響を及ぼすメカニズム、および、2) 高齢者の地域におけるソーシャル・キャピタルの生成過程や心理的基盤、を検討することとした。

3. 研究の方法

3年間の研究機関で行った一連の研究のなかから、研究代表者(福川)と2名の研究分担者(下方および小田)の代表的な研究成果として以下の3つを示す。

- (研究A) 互恵性のソーシャル・キャピタルと主観的健康との関連(福川)
- (研究B) 地域在住中高年者における社会的ネットワークと自尊感情の関連(下方)
- (研究C) ソーシャル・キャピタル形成の心理的基盤としての利他性と性格傾向との関連(小田)

4. 研究成果

(1) 研究A

目的

互恵性としてのソーシャル・キャピタルと主観的健康との関連を検討した。

方法

分析対象：年金シニアプラン総合研究機構(旧シニアプラン開発機構)による「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のデータを用いた。本調査は、全国から抽出した35歳から74歳までの中高年男女とその配偶者を対象に5年ごとに行われており、1991年の第1回調査から2011年の第5回調査まで、計25,333名が参加している。本研究では(配偶者ではなく)本人のデータ(n = 15,208)のみを分析することとした。分析に用いた変数に欠損や不明回答がある対象者のデータを除いたところ、最終的な分析対象者数は14,073名(男性10,691名、女性3,382名：平均年齢54.19 ± 10.95歳)となった。

調査項目：現在の健康状態を5件方で尋ねて結果変数とした。個人レベルの互酬性(独立変数1)として「社会の役に立つこと」が現在の自分にとってどの程度満たされているかを尋ねた。集団レベルの互酬性(独立変数2)として、生きがいとは「他人や社会の役に立っていると感じる事」である、

と回答した割合を、調査コホートごとに算出した。性別、年齢、学歴、配偶者の有無を調整変数とした。

結果

マルチレベル分析の結果、個人レベルの互恵性と集団レベルの互恵性はいずれも高い主観的健康と関連していた。ただし個人レベルの互恵性と主観的健康との関連は、調査コホートが集団レベルの互恵性が低いコホート(近年のコホート)ほど強いことが明らかとなった(図)。

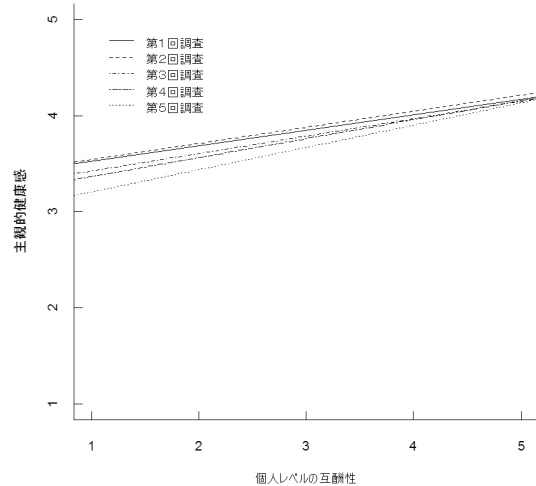


図 主観的健康感に対する個人レベルの互酬性の関係における調査コホートごとの検討

考察

個人と集団いずれのレベルにおいても、互酬性が高いと主観的健康感が高いことを示すものであった。ただし、本研究においては、2つの互酬性の効果に交互作用が認められ、集団レベルの互酬性が高いほど(古い年齢コホートほど)個人の互酬性が健康をもたらす効果は弱く、反対に集団レベルの互酬性が低いほど(若い年齢コホートほど)個人の互酬性が健康をもたらす効果は高いことが示唆された。ソーシャル・キャピタルが却って個人に悪影響をもたらす場合として、集団メンバーからの過度の要求がある。「お互いさま」といった互酬性の規範が共有されている社会ほど、それを逆手に取って非協力的(利己的)に振る舞う者が最大の利益を得ることができるという、いわゆるただ乗り問題(free riding problem)が発生しやすいからである。真島(2010)による進化シミュレーション研究によれば、このようなただ乗りを防いで集団内で互酬性を成立させるためには、利己主義者だけでなく、利己主義者に協力する「お人好し」の利他主義者にも非協力的な態度を貫くという徹底した非寛容主義の実践が必要であった。興味深いことに、この結果は、ソーシャル・キャピタルが充実していたかつてのアメリカが、同時に人種や性別などに関する差別意識が強い非寛容な時代でもあったとするPutnam(2000)の指摘と合致するも

のである。したがって本研究の結果は、互酬性の規範が共有されていない現代においては、個人レベルの利他的行為が搾取を免れ、むしろ健康増進効果を発揮しやすいことを示唆しているのかもしれない。

(2)研究B

目的

中高年者の社会的ネットワークと自尊感情の関連について、年代差の観点も含め検討した。

方法

分析対象：「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の第7次調査に参加した2330名(男性1178名、女性1152名。平均61.39±12.76歳)。

調査項目：ネットワーク構成人数(以下、構成人数とする)：社会的ネットワークをコンボイモデル(Kahn,&Antonucci,1980)を用い測定した。コンボイモデルは、個人にとって重要かつ情動的に近い関係にある人物を、同心円状の3つの円に親しさの段階を分けて書き込むことで社会的ネットワークを評価する方法である。中心から外側に向かって第1円、第2円、第3円が設定されており、中心に近い円ほど親しい関係を示す。本研究では面接調査によって得られたコンボイモデルから、第1円、第2円、第3円および3つの円すべて併せたコンボイモデル全体(以下、コンボイ全体とする)の構成人数を算出した。なお、本報告で用いた構成人数は、1対1の個人的なつきあいのある関係者のみとした。

自尊感情(Rosenberg,1965;星野,1970)：自己への全般的な評価について質問紙で尋ねた。社会経済的背景：配偶者の有無、就業の有無、世帯年収、教育歴を質問紙で尋ねた。

結果

男性では、コンボイ全体、第1円、第2円で構成人数の主効果(少群<多群)がみられた。女性では、コンボイ全体、第1円、第2円で構成人数の主効果(少群<多群)がみられた。また、コンボイ全体と第2円で交互作用がみられ、コンボイ全体では、50代と70歳以上において少群よりも多群の自尊感情得点が高かった。第2円では、50代の少群よりも多群の得点が高かった。

考察

中高年者において、人とのつながりの多さと自己への評価の高さが関連することが示唆された。男性においては、どの年代でも人とのつながりが多いほど、全般的な自己評価が高く自信をもちやすいことが示された。女性においては、年齢による差異が示され、50代と70歳以上で、人とのつながりが多いものが少ないものよりも自己への全般的な評価が高いことが示された。この年代の女性の社会的ネットワークは、子の巣立ちや配偶者

の死などのライフイベントによって変化が大きい可能性があり、今後はライフイベントも考慮した社会的ネットワークの検討が必要であると考えられる。

(3)研究C

目的

ソーシャル・キャピタルの心理学的基盤としての利他性と性格傾向との関連について、利他性を向ける対象との関係性に配慮して検討した。

方法

対象：の男女大学生(平均年齢19.7±1.2歳)を対象とした調査を行った。

尺度：家族、友人、他人の3カテゴリそれぞれに対する利他的行動傾向を集計して分析に用いた。Big5性格検査を施行した。

結果

性格5因子のうち、外向性は3種の利他性カテゴリのいずれとも正の相関を示した。勤勉性は家族への利他行動とのみ、協調性は友人にのみ、開放性は他人にのみ、有意な正の相関を示した。

考察

本研究の知見は、性格傾向の各側面がそれぞれ利他性の進化に対する独自の心理的基盤を持つ可能性を示すものである。例えば、外向性は対人関係の維持における最も基礎的な性格要因であることから、関係のカテゴリにかかわらず利他性と有意な関連を示したと考えられる。これに対して勤勉性は長期的、協調性は中長期的、開放性は短期的な関係の維持に有用な心理的機能を持つと思われる。これらの結果はヒトが集団性を獲得する過程で必要とされた心理的適応の所産であるといえるかもしれない。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

Fukukawa, Y.: 2013 Social network dynamics and psychological adjustment among university students. Journal of Educational, Health and Community Psychology, Vol. 2, No. 1, 9-18. (査読有)

Oda, R., Machii, W., Takagi, S., Kato, Y., Takeda, M., Kiyonari, T., Fukukawa, Y. & Hiraishi, K.: 2014 Personality and altruism in daily life. Personality and Individual Differences, 56, 206-209. (査読有)

福川康之, 小田 亮, 宇佐美尋子, 川人潤子: 2014 感染脆弱意識(PVD)尺度日本語版の作成. 心理学研究, 85, 188-195. (査読有)

松本晶子, 小野口 航, 福川康之: 2015 人の移動動機の解明に向けて - 島人の離島

選好度と地理認知. 生物科学, 66, 112-120. (査読有)

丹下智香子, 西田裕紀子, 富田真紀子, 安藤富士子, 下方浩史: 2013 成人後期の主観的幸福感に対する配偶者の有無と対人関係の影響, 日本未病システム学会雑誌, 19, 88-92. (査読有)

西田裕紀子, 丹下智香子, 富田真紀子, 安藤富士子, 下方浩史: 2014 高齢者における知能と抑うつとの相互関係: 交差遅延効果モデルによる検討. 発達心理学研究, 25, 76-86. (査読有)

Oda, R.: 2013 Refusal of killing a stranger to save five brothers: How are others' judgments anticipated and favored in a moral dilemma situation? Letters on Evolutionary Behavioral Science, 4, 9-12. (査読有)

[学会発表](計6件)

Fukukawa, Y., Onoguchi, W. & Oda, R.: 2014 Reciprocity as social capital and self-rated health in Japanese community-dwelling adults. The 7th International Conference on Health Psychology. (11月10日, ハバナ(キューバ))

松本晶子, 石川愛梨, 宇野祥子, 国場智海, 島袋亜生, 豊見山佐妃, 外間香織, 宮良丞, 村上輝, 小野口航, 福川康之: 2014 人の移動動機の解明に向けて1 - 島人の離島好感度と地理認知. 日本人間行動進化学会大会. (11月29日, 神戸(兵庫))

森山雅子, 西田裕紀子, 丹下智香子, 富田真紀子, 大塚礼, 安藤富士子, 下方浩史: 2015 地域在住中高年者における社会的ネットワークと自尊感情の関連 - コンボイモデルを用いて -. 日本発達心理学学会大会. (3月20日, 東京(東京))

丹下智香子, 西田裕紀子, 富田真紀子, 大塚礼, 安藤富士子, 下方浩史: 2013 成人中・後期における「死に対する態度」の縦断的検討. 日本心理学会大会. (9月15日, 札幌(北海道))

小田亮, 武田美亜: 2013 パーソナリティは利他行動にどう影響するのか-対象別利他行動尺度による検討-. 日本パーソナリティ心理学会大会. (10月12日, 東京(東京))

加藤太基, 平石界, 小田亮: 2014 利他的な嘘 - どのような人が、どのような嘘をつくのか? 日本人間行動進化学会大会. (11月29日, 神戸(兵庫))

[図書](計3件)

五百部裕, 小田亮他: 2013 心と行動の進化を探る -人間行動進化学入門-, 朝倉書店, 204 (1-35).

大藪 泰, 福川康之他: 2014 人間関係の

生涯発達心理学, 丸善出版, 178 (123-155).

竹村和久, 福川康之他: 2015 「心理学叢書第4巻: 無縁社会のゆくえ 人々の絆はなぜなくなるの?」, 誠信書房, 206 (136-149).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福川 康之 (FUKUKAWA YASUYUKI)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 90393165

(2) 研究分担者

下方 浩史 (SHIMOKATA HIROSHI)

長寿医療研究センター・予防開発部・部長

研究者番号: 10226269

小田 亮 (Oda Ryo)

名古屋工業大学・工学(系)研究科・准教授

研究者番号: 50303920